

二〇三年度 倉敷芸術科学大学 一般選抜

前期 B

〔国語〕

一、次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

社会というのは、どこかに食い込まないといけない。社会から弾かれて、そのままという人が、若い人でも意外に多い。社会は人を弾くのだ。めったに入ってくれない。いまや、正社員にはめったにしてくれない。時給で都合よくパートで働かせて……というフウチョウ^aが高まっている。

そのなかで社会に食い込む技術を教えなければならないのだ。ただ単に学校を出ただけでは、仕事に就けない。そうすると人生全体がやはり、だんだんつらくなってくる。経済的にも苦しくなってくるし、自分のやりがいが見つけられない。そういう人生はやはりつらい。

そうさせないようにするという意識が、小学校、中学校の先生にも必要だと思う。いままで、そういう意味でのほんとうの社会性——社会で通用する力という意味での社会性——を、小・中・高とどれだけの教師が意識して、日々授業をしてきただろうか。

もちろん学問を通して人間を育てるわけだから、学問を教えるのは基本だ。けれども、常に「この子は果たして、社会のなかに食い込んでいけるのだろうか」という意識でいたら、教え方そのものも変わってくるだろう。

たとえば、算数で何度も何度も同じミスをする。(①)、単に算数ができる、できないという問題にとどまらない。いまこれをやろうとしているときに、まさにその当のことが頭に入らず、抜けてしまう。それは、たとえばウエイトレスになった時に、注文を忘れてしまうということだ。大事な用事を忘れてしまう。それを忘れないようにする訓練をしているのだ。

あるいはテストで「(②)、本当はできるのだけど、ケアレスミスで一〇点を失っちゃったから、結果は七〇点だけれど、本当は八〇点なんだ」などと言う生徒がいる。

でも「その『本当は』などというのは意味がないんだよ」と教えないといけない。できていない、ということが問題なのである。テストだったら、解答を返してくれる。それがケアレスミスで点を失ったとわかるけれども、社会では、相手はそれを言ってくれない。(③)その人に仕事を頼むのをやめるだけである。

たとえば、英語の本のシタヤク^bを頼んだとする。その訳文をざっと見ていくと、日本語として明らかに意味の通じない文章が出てくることもある。そこは誤訳の可能性が高い。原書のほうは、(④)意味が通ずるように書いてある。英語力以前に日本語として「これはおかしい」ということに気がつかないといけない。気づけば、もう一度ジシヨ^cを引き直す。それでもわからなければ、「ここは意味がとれませんでした」と書いておくべきだ。不安な所をあいまいに放置してしまう無責任さが、仕事では一番まずい。

(中略)

たとえば、時間や提出期限に関してルーズだということ。それは友達同士の関係なら何とかなるものの、社会人になるとほぼ許されない。学生の間は許されているが、その気分が抜けずバイト感覚ですつとルーズな人に対しては、途中から相手も注意するのがメンドウ^dくさくなる。「こいつには頼むまい。社会性がない」ということになる。学校はそういうことも訓練するところなのだ。

(⑤)、「遅刻してもいいよ」「ケアレスミスしてもいいよ」という社会であれば、学校もそのようにルーズに対応しているかもしれない。そうすれば、楽しく過ごせばいいという場所になるであろう。しかし、社会は現実にはそうならないし、年々もっとハードになってきている。

評価がどんどん厳しくなっている社会の中で、逆にゆとり教育といった形で「あんまり勉強ばかりせず、のびのびと個性をハッキ^eすればいいんだよ」という教育をしたところで、ギャップが起きてしまうわけだ。

「信用」を得るために何が必要なのか。これをしっかりと教えるのが教育者の使命である。

(齋藤孝『教育力』による)

問一、波線部 a～e のカタカナを、漢字に改めよ。

問二、空欄 (①)～(⑤)に入る語句を次の中から一つずつ選び、記号で記せ。

ア 仮に イ それは ウ いつも エ どうしても オ 必ず カ いったん キ 次から

問三、傍線部 1「ただ単に学校を出ただけでは、仕事に就けない」ことを端的に表現した文章中の七字を抜き出せ。

問四、傍線部 2「ほんとうの社会性」がない人について、文章中に三例挙げられている。次の〔例〕以外の二つを記せ。

〔例〕同じミスをしたり、ケアレスミスを軽視したりする人。

問五、傍線部 3「これをしっかりと教える」について、何を何のために教えるのか、わかりやすく説明せよ。

二、次の文章Aはある文学作品の抜粋であり、文章Bはその文学作品に関する近年の新聞記事の抜粋である。この2つの文章を読んで、後の設問に答えよ。

文章A

そのとき、マミーが玄關¹⁾ホールの床をゆらしながらのしと歩いてくる足音が聞こえてきたので、スカレットはあわててお尻の下から足を引っぱりだし、なごやかな表情を作ろうとした。(A) しかしそんなことをしたところで、マミーはなにかおかしいともなく気取るだろう。この乳母はオハラ家の人々については身も心も我がものように思っており、一家の密事は自分の密事と心得て、かすかに秘密の匂いでもしようものなら、ブラッドハウンドのごとく容赦なく臭跡を追っかけ始める。スカレットは経験から知っていたが、もし好奇心をただちに満足せしめなければ、マミーはこの件を女主人のエレンのところへ持ちこむだろう。(B) そうなれば、自分は洗いざらい母に白状するか、まことしやかな嘘を考えだすはめになる。

マミーがホールから姿をあらわした。象のように細くて抜かりのない目をした、巨体の老女である。つやつやとした黒い肌をもつ生粋²⁾のアフリカンであり、血の最後の一滴までオハラ家に捧げる心意³⁾をもち、エレンの頼もしい右腕であり、一家の三人娘も手上げのつわものにして、他家の使用人たちまで畏れ入らせていた。(C) エレンの母であるソランジュ・ロビヤール夫人の娘たちとともに育てられたのだが、夫人は趣味にうるさく、冷やかで、高慢なフランス婦人であり、実の子だろが使用人だろが、礼節に背くことがあれば、しかるべき罰を容赦なくあたえた。マミーはもともとエレンのばあやだったが、彼女の輿入れについてサヴァナの街からこの奥地へとやってきたのだ。愛すればこそ、その相手には厳しく接するという質だった。(D) スカレットへの愛情と誇りは絶大であったから、たえず厳しい躰⁴⁾がなされていた。(マーガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』より)

文章B

米国で黒人男性が白人警官に暴行され死亡した事件をきっかけに人種差別への抗議が広がるなか、配信が一時停止となっていた映画「風と共に去りぬ」が解説動画付きで戻ってきた。不朽の名作になぜ待たなかったのか。映画界では問題への理解を深める作品を配信する動きも相次いでいる。時代の写し鏡でもある映画は、差別の歴史とどう向き合っていくのだろうか。

■原作当時も「侮蔑的」批判 本編前に歴史解説つけ再配信、観客の視点変える？

1939年に公開された「風と共に去りぬ」。米アカデミー賞で作品賞など8部門に輝いた名作である一方、人種差別的だと批判の声があった。今月9日に米動画配信サービス「HBO Max」が配信を停止していた。

配信停止のきっかけとなったのは、誘拐された黒人音楽家の過酷な奴隷生活をつづった映画「それでも夜は明ける」の脚本家ジョン・リドリー氏の米紙への寄稿だった。「映画は南北戦争前の南部を美化し、有色人種の最も痛ましいステレオタイプを永続させている」と批判していた。

米在住の映画評論家の町山智浩さんは「南部の疑似的な貴族社会を美化し、奴隷制度の残酷な面を描いていないという批判は原作が書かれた時代からあった」と指摘する。その疑似貴族社会を支えたのが、綿花栽培などの労働力となった黒人奴隷だった。農園主の白人は、奴隷を「財産」として所有。黒人奴隷は白人監督のもとでむち打ちなどの暴力を日常的に振るわれ、過酷な労働を強いられた。

『アメリカ映画に見る黒人ステレオタイプ』の著書がある赤尾千波・富山大教授によると、映画では主人公に仕える陽気で生意気な乳母や従順な召使の男性が「マミー」や「アンクル・トム」と呼ばれる黒人ステレオタイプそのものとして描かれる。「奴隷の過酷な現実⁵⁾は描かれず、愚かでハッピーなキャラクターばかり登場する。でもそれは、奴隷であることに満足している様子を強調し、奴隷は良い制度だったと錯覚させてしまうのです」

大ベストセラーとなったマーガレット・ミッチェル(1900～49)の原作も、黒人の容姿や振る舞いに侮蔑的な表現があると指摘されていた。

『「風と共に去りぬ」のアメリカ』の著書がある米国在住のジャーナリスト青木富貴子さんによると、小説の中には奴隷と主人との関係を、大人と子どもとの関係になぞらえる場面もある。こうした描き方に対し、青木さんが取材した黒人の大学生や研究者の多くが不快感を示していた。

ミッチェル本人は生前、友人に宛てた手紙に「私は黒人を侮蔑しようなんていうつもりは全くない」と書いた。ただ、青木さんは「差別だと思っていないところに時代的な感覚のズレがある」と話す。ミッチェルは祖母から繰り返し南北戦争の話聞き、南部白人の価値観を受け継いでいたという。

「風と共に去りぬ」は24日、アフリカ系の映画批評家でシカゴ大教授のジャクリン・スチュワート氏による約4分半の解説動画を本編開始前に付けた上で、当時製作されたままの形で再び配信された。過去の偏見を消し去るのではなく、「より公平公正で包括的な未来を築くために、まず歴史を認め、理解しなければいけない」(HBO Max)との考えからだ。

米在住の映画ジャーナリスト猿渡由紀さんは解説動画について「映画が奴隷制の恐ろしさを否定していること、製作当時も抗議を受けていたことなどを専門家が語り、最後に『さあでは、これがその映画です』と言いながら『覚悟してね』と本編に入る。つまり、これを観る人の姿勢が最初から変わる。これはかなり画期的」と評価する。

(中略)

このような動きについては「一種の宣伝戦略なのでは」との見方もある。一方で、猿渡さんはここ数年の間に米アカデミー賞が白人だらけのオスカーと揶揄されたことや、大物プロデューサーによるセクハラ問題で「#MeToo (私も)」や「Times Up (もう終わりにしよう)」といった運動が生まれたことを背景に挙げ、こう語る。「マイノリティーや女性の声を取り入れ、ハリウッドが多様化する流れにあった。その延長線上で、人種差別の問題を今度こそ最後にしたい、という映画界の強い意志を感じる」

(朝日新聞2020年6月26日朝刊による)

問一、波線部a～eの読みを、ひらがなで記せ。

問二、次の文章は、文章Aの(A) (D)のいずれかに入るものである。最も適切と思われる箇所の記号を記せ。

「黒人ではあったが、行動規範とプライドにかけては農園主たちに引けをとらず、むしろ彼らより高いぐらいであった。」

問三、文章B中の傍線部1について、次の問いに答えよ。

①文章Aの登場人物のうち、黒人は誰か。

②文章Aに登場する黒人の容姿は、文章A中でいかに描かれているか。最も適切な箇所を二十四字で抜き出せ。

③文章Bの傍線部1「黒人ステレオタイプ」とは何か。文章Aと文章Bを参考にしながら、記せ。

問四、文章B中の傍線部2「一種の宣伝戦略」とはどういう意味か。文章Bの内容に即して記せ。

問五、文章Bで登場するような解説動画を付したうえで、過去の作品を配信するという動きについて、どう考えるか。自分の考えを

自由に述べよ。

二〇三三年度 倉敷芸術科学大学 一般選抜

前期 B
〔国語〕

一、

問五	問四	問三	問二	問一
				① a
				② b
				③ c
				④ d
				⑤ e

二、

問五	問四	問三			問二	問一
		③	②	①		a
						b
						c
						d
						e

受験地	受験番号					得点欄
						※

※は記入しないこと